

しごもり

第 12 号



1984年12月浮島沼にて

1996年2月

日本野鳥の会三重県支部

東海地方では昔から「冬至十日過ぎれば、誰でも昼と夜の長さの変わったことはわかるようになる」という格言があります。

今年の正月は穏やかな小春日和が続き、森の日溜まりでは、格言を知ったのか、野鳥のヤマガラやメジロなどが「うかれ歌」を披露していました。これは昨年からの暗い世相を幾分なりとも明るい雰囲気に変えるのに役立ってくれていたようでした。

ところが、それは表面のごく一部の出来事で、もっと深刻なことは、例年県内へ越冬しに来るはずの、森林性や草原性の野鳥たちの種類と個体数がまれにみる減少ぶりを示していることです。都市近郊でよく見られるヒヨドリ、メジロ、エナガ、キジバトは昨年の秋以来、どこへ行っても個体数が少ないのです。そのため、ナンテン、センリョウ、ピラカンサといった赤い実が今もたわわに枝に付いているのを見ます。彼らが食べに来ないからです。さらに、秋になるとシベリア方面から南下してくるシロハラ、ツグミ、アオジ等に至っては、今年の冬は数の少なさから珍鳥を観察するような雰囲気と感動を覚えます。

そんなことを考えながら、毎日の通勤途上の道路をいろいろ変えて歩くのですが、野鳥に出会う機会は少

ないのです。これは愛知県、岐阜県でも同じような状況だそうです。もちろんその原因の分かる人はいません。異常気象で寒気団と暖気団がぶつかりあう位置で、ジェット気流が災いし、カリマン渦が例年にない位置に次々に発生し、それが低気圧となって発達する際に、かなり高緯度まで暖気団を持ち込み、大雪とはなるものの、降雪にかなりのむらができ、野鳥たちは南下することなく、北方に集団的に閉じこめられてしまい、この東海地方に姿を見ることがないのではないのでしょうか。さらに、北極圏から南下する寒気団と高気圧の峰が、今年は経度が少しづれ例年より西に張り出し、低気圧は北海道沖で消滅しています。

従って、東海地方のこの冬は今までに記録がないか極めて記録の少ない珍客ぞろいの、メジロガモ、ハンゲツシマアジ、ツクシガモ、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウ、マナヅルなど大型野鳥が渡来する結果となったようです。

これらを総合すると、野鳥にストレスを与えないように広域的なネットワーク情報が必要となってくると同時に、今以上に湿地の開発はしてもらいたくないと念願するだけです。

(すぎうら くにひこ、支部長)

目次

ニュース	今年の冬鳥に異変――	3
会員のページ	――	4~7
野鳥情報	――	8
探鳥地マップ④	石垣池――	9~10
パートウォッチング入門講座④	――	11
探鳥会報告	――	12~15
支部活動から	――	16,17
お知らせ	――	18

今号の表紙 絵：平井正志

チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

ハトくらいの大きさのハヤブサの仲間です。本州の中部から北部で繁殖し、冬は全国の耕地や河原などで見られます。ひらひらとまるでコアジサシのように飛んで、ホバリング（停空飛翔）から急降下し、獲物を爪で握り殺します。スズメなどの小鳥やネズミが餌になります。

県内でも広く見られます。特に今年はその姿を見ることが多いように思いますがいかがでしょうか。

今年の冬鳥に異変！

今年の冬鳥に異変がおきています。冬の代表的な渡り鳥であるツグミやシロハラなどを見るのが大変少なく、一方、ツクシガモやコクガンといった、この地方ではめったに見られない鳥の飛来が新聞紙上ににぎわせました。そこで、こうした状況について少しまとめてみました。(編集部)

冬鳥が少ない

会員と顔を合わせると、「少ないね」「どうしたんだろうね」という言葉が挨拶代わりになっています。皆さんが実感しているこの冬の鳥の少なさですが、実際はどうか、支部主催の探鳥会の記録を調べてみました。

11月から1月に開催された探鳥会の内、昨シーズン(94~95年)と今シーズン(95~96年)とで開催場所や時期がほぼ共通するものを15選び、出現した鳥の回数を比較しました。結果は次の通りです。

ツグミ	11⇒6
シロハラ	5⇒2
アオジ	12⇒7
シジュウカラ	13⇒4

確かに減っていることが分かります。このことは探鳥会報告のメモでも多く取り上げられ、報告者が危惧しているところです。ツグミなどの渡り鳥だけでなく、冬里に下りてくるシジュウカラまでが少なくなっています。

こうしたことの原因は簡単に分かることはありません。新聞においてもいろいろのことが言われているようですが、自然の中で生きていく鳥たちの異変ですから自然環境になにがしかの原因があると考えられます。大変気になるところです。

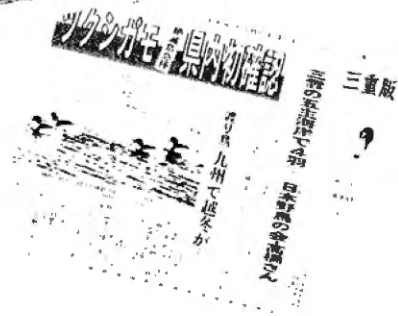
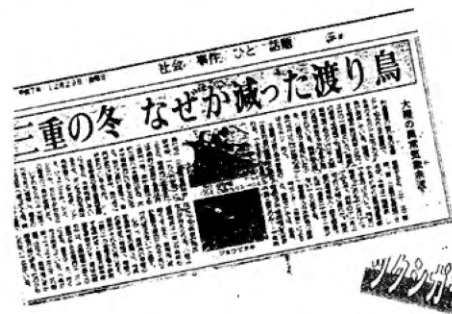


珍鳥が来県

冬鳥が少ないかわりという訳ではないでしょうが(あるいは関係あるのかもしれませんが)、三重県では珍しい鳥の来訪が相次ぎました。ツクシガモやコクガン、ナベヅル、オオハクチョウなどです。新聞や関係者の情報で、あちらこちらと走り回った方もあるかと思えます。

私もツクシガモを見てきましたが、赤い嘴と白い体色が印象的な美しいカモでした。また、早速県が誤発砲防止のための看板を設置していたのも印象的でした。これは高橋副支部長の申し出によるもので、過去の失敗(1989年コクガン事件)を繰り返さないようにという配慮に県が俊敏に対応したものでした。でも、ツクシガモはじきにどこかへ行ってしまいました。

珍鳥の来訪は興味をかき立てますし楽しみなことではありますが、もとより、私たちにとって大切なのは身近な鳥たちとそれをとりまく普通の自然環境です。ましてや、珍鳥の来訪も自然の異変の一つかもしれないと考えると、喜んでばかりはいられません。むしろ大切な身近な鳥たちの状況の方が心配な今年の冬でした。



屋久島の野鳥について

水野明紀

早いもので屋久島へ来てもうすぐ1年になります。余り時間がなく島内をくまなく見て歩くわけにはゆきませんが、取りあえず屋久島での野鳥の印象をご連絡しようと思います。

☆シジュウカラ、セグロセキレイ、ドバトがいない
 どうしてかシジュウカラがいません。その代わりかどうかわかりませんが、ヤマガラがシジュウカラによく似た声で鳴きます。ヤマガラはその他にヒガラによく似た声も出します。それから、セグロセキレイもいません。2～3月になるとハクセキレイが10～20羽位の群で島に立ち寄りてゆきますが、亜種のホオジロハクセキレイが必ず1～2羽混じっています。ムネアカタヒバリの数も多いようです。大きなお寺がないせいかどうかドバトがいません。伝書バトを飼っている人もいないようです。

☆鷺鷹類が渡って行きます

9月中旬から10月の中旬にかけて鷺鷹類が渡って行きます。今までに確認できたのは、アカハラダカ、サシバ、ハチクマ、チョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ハイトカ、ノスリ、ハヤブサです。サシバは越冬するのがいます。冬の雨に打たれて電線に首をすくめて止まっている姿は、なにか寂しげで鷺鷹の威厳はまったく感じられません。

☆シロハラ、ルリビタキが多い

冬、林縁とか農地にシロハラ、ルリビタキが多く、特にシロハラはあまり人を恐れぬのがいます。2～3メートルの距離に近づいても盛んに木の葉をひっくりかえしています。

☆ハイビスカスは年中咲いています

ハイビスカスは年中咲いていますが、花びらが大きいのでメジロは花びらの横に穴をあけて蜜を吸っています。ヒヨドリは苦勞せず蜜を吸えます。

☆サンショウクイは亜種です

リュウキュウサンショウクイ（頭が黒く身体全体も色が濃い）年中います。鳴き声は少し濁り気味。土地のおばさん達も多少濁り気味でご主人のことを「とおじゃん」と呼んでいます。

☆ウグイス

ウグイスは「ホーケキョ」と囀ります。父島でも確か同じでしたが、父島のは「ギューホッ」とも鳴いていました。三宅島はどうだったか。

☆ヤブサメも年中います

家で飼っている猫はよくバツタとかトカゲ、カナヘビを捕まえてきます。その都度庭へ逃がしてやっていますが、家の回りのトカゲ、カナヘビはシッポのないのが殆どです。東京にも多いと聞いています。先日はヤブサメを捕ってきました。短い尾が抜けてしまっていたのですが、無事茂みの中へ放してやりました。

☆ヒヨドリ、キジバトは昔のまま

以前市街地にヒヨドリ、キジバトは秋から冬にやって来ていましたが、屋久島の集落周辺では今でも秋から冬にやって来ます。春から夏は山の上の方にしかいません。アオバトも同じのようです。ズアカアオバトは年中集落周辺にいますが、数が少なくなりますので、高地の方へ移動しているものもいるようです。

☆スズメも渡って行く？

屋久島ではスズメは人家の多い宮之浦と安房にしかいません。8月下旬100羽程のスズメの群が自宅近くの人家に隣接した畑にやってきていました。2～3日後には1羽も見かけなくなりました。9月中旬人里離れた島の西端にあたる屋久島灯台にスズメが1羽いました。これも移動の途中なのでしょうか？

☆カツオドリは悠然と

春から初夏にかけて、カツオドリが海上を飛んでいるのをよく見かけます。悠然としていて力強い羽ばたきは堂々たるものです。

思いつくままに屋久島の鳥に関する事等を記してみました。11月24日に標高千メートル近く以上の所に初雪が降りました。自宅近辺はまだ暖かく素足でセーターも上着もなしで過ごしています。庭に植えたパイナップル、アシタバそれにハーブ類は元気に育っています。無理を言って送っていただいたクレソンも順調です。あと暫くビールの美味しい時期が続くと思います。(1995年11月末記す)



オオタカのハンティング

吉 居 瑞 穂

明日は杉浦先生の代わりに、勾玉池の観察会の案内をしなければなりません。1995年12月1日、下見のため午後2時40分頃、勾玉池に行きました。

休息所の前を通り過ぎてすぐ、菖蒲園のふちに1羽のタカが降りているを見つけました。こちらを振り返った顔には白い眉斑、胸は白く縦の斑、背中の色は薄く、白い斑点が…「オオタカの若鳥！」すぐ目の前です。

「どうして飛び立たないの？」前の水面には羽毛が散らばっています。上からカラスが騒ぎたてています。

「お腹がいっぱいで飛び立てないのかな？」などと一人で納得していたら、足を少し動かしこちらに身体の向きを変えました。その足には何かがかかり握られているようです。双眼鏡でよく見ると、マガモの首ではありませんか。その時、オオタカは獲物を放し、対岸の木に飛んでいってしまいました。

池を一周してきてはまだ、オオタカはじっと木に止まっています。死んだカモは少し流されて岸から離れてしまいました。3時35分、やっと飛び立って菖蒲園の中程に降りました。しばらく様子をうかがうようにして、やがてゆっくり水際に歩いて行きました。それからカモの上に飛び乗り、両の翼で水をかいて1mあまり岸边まで運んできました。

その時、遠巻きにしていたカモたちが一斉にオオタカの方を向き、緊張した小声をたてながら少しだけ詰め寄り？ました。オオタカはそんなことにはお構いなく、カモを引っ張り上げようと数度やってみましたが失敗。足で獲物をつかんで思い切り引き上げようとしたので、お腹を上にしてうしろにもんどりうってひっくり返るのを見て、思わず笑ってしまいました。またまたカラスの嫌がらせが入り、対岸の木に飛んでいってしまいました。今度は木の上で翼と尾羽をひらいて、まるでウミたいなかつこうで濡れてしまった羽を乾かしています。そのうち、もっと遠くの山の木の方へ移ってしまいました。

4時40分、いじわるカラスはねぐらに行ってしまう、私も寒くて、待ちくたびれてもう帰ろうかなと思いはじめたその時、オオタカは再び菖蒲園に戻ってきました。今度は獲物は岸に流れ着いていて、数回引っ張ると引き上げることができました。もうあたりが暗くなりかけた4時45分、羽をむしり始めました。ハンティングから数えるとどれくらい時間がたっていたのか分かり

ませんが、2時間以上かかってやっとえさにありつけたのです。翌朝9時頃、もう一度行ってみましたが、食べ跡などはほとんど分からない状況でした。

1991年12月にも二ツ池でオオタカのハンティングを目撃しましたが、この時も、つかまえたゴイサギを両方の翼で水をかきながら岸まで運びました。

オオタカが水上で自分と同じような体重の獲物を手に入れた時は、このように翼をかいのように使って運ぶようです。また、いつも人がいるような場所でもオオタカがハンティングをしているのですね。

一緒に見た人 勾玉池：林、下和田
二ツ池：林、橋本

宮川を下る

小坂里香

岩の上立ち凍々しき青鷺の双眸に映る我も見る空
踊るごと尾もて岩打つ鶴鴿の生命輝く川ありてこそ
翡翠のきらり浅瀬に漁るを漕ぐも忘れて見惚けてをり
鳶の尾の舵とりの上手さや高く低く自在に遊ぶ風の間に
見下ろして何をか思ふ百合鷗河原に憩ふ翼なき我
鶺鴒舞ひて湊は近くなりけり漕ぎ行く方より潮満ち来ぬ

10月8日 日曜日 朝雨

朝日新聞で探鳥会のお知らせが載っていました。私は一度参加したいと思っていましたが、当日は雨。この雨の中では探鳥会は中止かと思いつつ出掛けてみました。するとテントを張って大勢の人がいました。私はすぐ参加することができました。これもリーダー（林さん）を始め皆さんが暖かく迎えていただいたことです。この探鳥会の皆さんに感謝いたします。

この探鳥会で色々のお話を聞きました。特にサシバのお話は初めて聞くことばかりで勉強になりました。大きな画用紙の絵でサシバの特徴や飛んでくる場所とかを、マンツーマンで教わり感激しました。鳥羽市の琴平さんや小涌園の近くでも見ることができますよと教わり、翌日の9日、10日、11日と、三日間続けて小涌園の近くに行きました。

10日も朝8時半に行きました。この日は2歳くらいの子どもを連れた若い夫婦が、横浜から伊良湖を経て来たのですが伊良湖では150～200人位の探鳥会の人が出てきましたよ、鳥羽はおじさん一人ですか、鳥羽でも見られますか、サシバはどんな鳥ですか、等色々とお話をしました。私は先日教わったお話がすぐ役立ちました。若い夫婦はサシバを一度見たいだけだな……見られますよ、9時30分～10時位にはと言ったら、残念だが時間がないのでと言って帰ってしまいました。

その後すぐ10羽～20羽～30羽と頭の上を優雅に飛ぶ。双眼鏡、カメラと思いつつながら双眼鏡のピントが合わない。あわてながらサシバとの出会いに大感動しました。あの横浜の若い夫婦、もう少し待てばサシバに出会えたのにと、私はサシバを独り占めにしてしまいました。

二ツ池にて探鳥会

加島隆子

会員の仲間入りをさせていただいて4年位になりますが、その間、何回となく二ツ池での探鳥会の案内をいただいております。近いところでもあり、一人で行くには少し寂しい所なのでいつもこの探鳥会を楽しみにしていましたが、雨になることが多くて、今回も2、3日前から天候が気になっていました。朝になったら、やはり今にも泣き出しそうな空模様。とにかく行ってみると、すでに5、6人の方が見えていました。その内、薄陽がさして来たではないですか。

23号線を車で通るたび大きい方の池が見えるので、11月頃には沢山のカモたちが降りていたのに、12月に入って少しもカモの姿が見られなくなってどうしたことかと、これではせっかくの探鳥会をお世話下さる林さんに気の毒だなあと思っていました。でも、片方の池で、色々なカモ、カワセミ、ウ、サギ類を見ることができました。もう一つの池に移る途中では、タカ類でも出たのでしょうか、コサギらしき羽が、道より小高くなったところに固まって落ちているのを見つけま

鳥を詠む

菊川幸子

人影に遠のく鴛鴦の水尾光る
見定めて雀つぎつぎ櫓田へ
ひめ皇子の都恋しと揚雲雀

(斎王祭)

鷺のむれ漁りせわし川涸れて

(去年の夏五十鈴川で)

翡翠の水より抜けて耀きぬ

短歌三首

広 八太郎

たそがれにあやしく浮かぶジョウビタキ

ねぐらは初の藤里の宿

新しき家の玄関ねぐらとなして

一羽暮らしのジョウビタキ見ゆ

藤里のねぐらを出でしジョウビタキ

朝光^{あさひ}をあび縄張りを告ぐ

(吉居さん宅でねぐらをとるジョウビタキの

様子を詠ったものです)

した。きれいな冠羽などを拾いました。また、少し先に、今度はカモらしきたくさんの羽が、水面より引き上げられたように、路肩に2、3メートルにも渡って散らばっているのが見られ、これにはびっくりしました。これでは鳥たちも警戒して降りてこないのでしょうかね。

いつの間にか探鳥会も終わりの時間となり、20名位の方々に鳥合わせをして、また来年お会いしましょうと、無事散会しました。

南米チリ紀行②



コンドルを見た

日曜日、O氏が標高2,800mにある Portillo スキ一場につれていってくれるというので、喜んで車に乗り込んだ。Santiago を離れて北に向かう。

ここは地中海性気候だとはいうが、日本と比べれば極度に乾燥している。市街を離れると灌木がまばらに生えただけの平野が続く。所々にナノハナの黄色の土地が見える。ただし雑草だという。やがて山地にさしかかる。やはり乾燥し、灌木にサボテンをまじえた牧草地あるいは全く利用されていない。遠く雪をいただいたアンデスがしだいに近づく。Los Andes の町の近くまで来るとブドウやモモの果樹園が混じってくる。O氏が Aconcagua が見えるという所で車をとめる。なるほど雪の山脈のそのむこう、空にとけ込みそうな、しかしごつごつした山が見える。雪はあまりついていない。アルゼンチン領にある7,000mに達しようとする南米第一やアメリカ大陸第一の高峰である。しかしとても写真に写るようなコントラストではない。写真は帰りに期待してさらに先を急ぐ。

Los Andes をすぎると Rio Aconcagua の谷に入る。谷はこれまでの乾燥地に比べれば、人家もあり果樹なども栽培されている。人家のまわりにはスモモであろうか白やピンクの花が咲き、ヤナギはもえぎ色の芽をふいている。しかし周りの山肌は依然岩とまばらな灌木だけであり、川の水は濁っている。アンデスを越

勾玉池探鳥会に参加して

谷口ひろ子

探鳥会に参加させていただくようになって、やがて1年になろうとしています。冬の外宮勾玉池で指導者の方に解説していただき、マガモ、コガモ、ヒドリガモの三種類を目の当たりでじっくり観察できました。初心者の中には種類の少ない方がよく覚えられてよかったと思います。

他の小鳥の名前、鳴き声はまだ分かりませんが、探鳥会に出かけるのが楽しみです。

日頃の生活においても、今まで見過ごしていた道端でも、ふと足を止めて鳥の遊ぶ姿を追うようになりました。自分の身近なところにも小鳥達の世界を発見して喜びを感じています。

文・絵 平井正志

えてアルゼンチンに続くこの道路にはトラックが結構多く、それもほとんどが荷物を満載したフルトレーラーである。今にも止まるかと思うほどの超低速でアンデスにむけて坂道を登っていく。谷は次第に狭まり、人家もまばらになり、雪の峰は次第に近づいてくる。途中 Aconcagua の川が狭い岩の間を通るゴルジュがあった。鉱山の鉱石を積んだ列車が対岸の軌道を通る。昔はアルゼンチン領まで通じていた鉄道だという。今は鉱石の運搬のみに利用されている。

谷あいに車を止めて小休止する。もはやこの谷に人家はなく、川の水も澄んできた。空は紫色を帯びどこまでも澄んでいる。雪を所々にかぶった岩の峰は対岸にそしてこちらの岸にもせまっている。その高さ、そして一気に Aconcagua の川まで切れ落ちる岩の壁。コンドルでもないかと双眼鏡で峰のあたりを探す。いた！黒い鳥、まさしく猛禽。翼をV字にひらいて、はるか上空、岩の峰の上を帆翔している。2羽である。O氏に見せるとコンドルだという。旋回する時に気のせいかわい部分が見える。よく探すと4、5羽はいる。しばらく旋回して岩の峰のむこうに隠れ、またどこからともなく現れ、空にとけこんでいく。

世界最大の猛禽コンドルを見た。それと確認するにはあまりに遠かったが、何ものをも寄せ付けないアンデスと雪と岩の峰、吸い込まれるような高い空。コンドルのみが棲むことのできる世界ではなからうか。谷底の道路ではあいかわらずアルゼンチンに向かう巨大なトレーラーがあえぎながら登ってくる。

野鳥観察初体験の秋のシーズンに、初心者には識別困難とされるシギ・チドリ類を敬遠せず、どれほど確認できるか挑戦を試みた。観察場所は、主に雲出川河口から三渡川河口までの三雲町の海岸と水田地帯であった。

7月下旬からすでに秋の渡りが始まっていることに驚き、できる限り見落とさない様に慎重に観察を続けた結果が別表の33種であった。

なお、記載した種はすべて識別可能な記録写真を撮り、フィルムは筆者が保管している。この記録の最終観察日は1995年12月31日である。

8月休耕田で群をなしていたコチドリは、9月中旬になると急速に姿を消す。キョウジョシギも8月中旬に海岸に多数飛来するが、9月に入ると見られなくなった。ヒバリシギは8月中旬に休耕田でよく見かけるが数は多くない。ウズラシギも意外と少なかった。キリアイは8月下旬に飛来し、9月1日に最多の6羽を観察できた。キアシシギ、タカブシギはすでに7月下旬には多数飛来していたが、10月初旬に急速に数を減じた。オグロシギ、ツルシギの秋の飛来は少ない。コアオアシシギは12月末まで5羽を観察できた。エリマキシギは2♂1♀であったが、春の飛来を期待したい。

アメリカウズラシギは珍品であった。コオバシギも少ないが、オバシギ、ダイゼンの群の中で計4羽を観察した。セイタカシギは3ヶ所で観察したが同一個体と思われる。オジロトウネンも少ないが6羽は確認できた。ツバメチドリは成鳥2若鳥6を観察したが、繁殖を確認したものである。留鳥とされているタマシギは8月中に多く見かけたが、稲刈り後は突然姿を消し全く見られなくなった。どこへ行くのだろうか？

この他、数種のシギ・チドリ類を見ているが、確実な証拠をお見せできないので省いた。次のシーズンには、ぜひとも識別に足る記録写真を撮り報告したい。

シギ・チドリ類を敬遠せずに、積極的に識別しようとする努力は、野鳥への興味を倍加させることを体験した。初心者の方々は、シギ・チドリ類を避けずに、積極的に識別に挑戦して頂きたく思います。

最後になりましたが、いつも野鳥観察に取り組む正

	初 認 日			最 終 確 認 日	
	羽数	日	場所	羽数	日
コチドリ	10	7/24	三雲町笠松	3	9/17 三雲町五主
キアシシギ	14	7/24	三雲町五主	3	10/12 松阪市彌師町
タカブシギ	6	7/24	三雲町五主	1	10/17 三雲町笠松
ヒバリシギ	1	7/24	三雲町五主	1	9/14 三雲町曾原新田
アオアシシギ	1	7/27	三雲町喜多村新田	1	12/30 三雲町曾原新田
タシギ	2	7/27	三雲町星合	5	12/30 三雲町曾原新田
タマシギ	2	7/29	三雲町星合	2	10/12 三雲町喜多村新田
チュウシャクシギ	17	7/30	三雲町喜多村新田	8	10/16 三雲町喜多村新田
★ツバメチドリ	3	8/01	三雲町星合	1	9/25 三雲町喜多村新田
ソリハシシギ	1	8/02	三雲町五主	10	10/16 三雲町五主
ムナグロ	8	8/03	三雲町星合	2	10/31 三雲町喜多村新田
ハマシギ	6	8/05	松阪市高須町	約120	12/31 三雲町五主
メダイチドリ	3	8/05	明和町八木戸	1	11/09 三雲町五主
ダイゼン	3	8/05	三雲町五主	4	12/28 三雲町五主
トウネン	24	8/07	三雲町五主	約50	11/25 三雲町五主
キョウジョシギ	12	8/07	三雲町五主	1	8/31 三雲町曾原新田
オバシギ	1	8/13	三雲町曾原新田	5	10/17 三雲町五主
オグロシギ	1	8/13	三雲町曾原新田	1	11/14 三雲町曾原新田
オオソリハシシギ	2	8/15	三雲町曾原新田	10	10/02 三雲町曾原新田
キリアイ	1	8/20	三雲町五主	1	9/02 三雲町五主
ウズラシギ	1	8/23	三雲町五主	1	9/14 三雲町曾原新田
★エリマキシギ♂	1	8/24	三雲町星合	1	9/17 三雲町五主
ツルシギ	2	8/26	津市島崎町	1	11/14 三雲町五主
★オジロトウネン	2	8/26	三雲町五主	1	9/21 三雲町五主
クサシギ	1	8/31	總野町津屋城	1	11/20 津市雲出島貫町
★アメリカウズラシギ	1	8/31	三雲町五主	1	9/08 三雲町五主
ダイシャクシギ	3	9/10	香良洲町川原	1	12/30 三雲町五主
ホウロクシギ	1	9/10	三雲町五主	1	10/20 三雲町喜多村新田
※コアオアシシギ	1	9/11	三雲町曾原新田	1	12/30 三雲町曾原新田
アカアシシギ	1	9/16	三雲町五主	1	9/16 三雲町五主
エリマキシギ♀	1	9/17	三雲町笠松	1	9/17 三雲町五主
※アカエリヒレアシシギ	1	9/20	三雲町五主	1	9/25 三雲町五主
※コオバシギ	2	9/20	三雲町曾原新田	1	10/17 三雲町五主
★セイタカシギ	1	10/05	松阪市高須町	1	10/06 三雲町喜多村新田

★本部研究センター野鳥記録検討会にて公式記録と認定された種

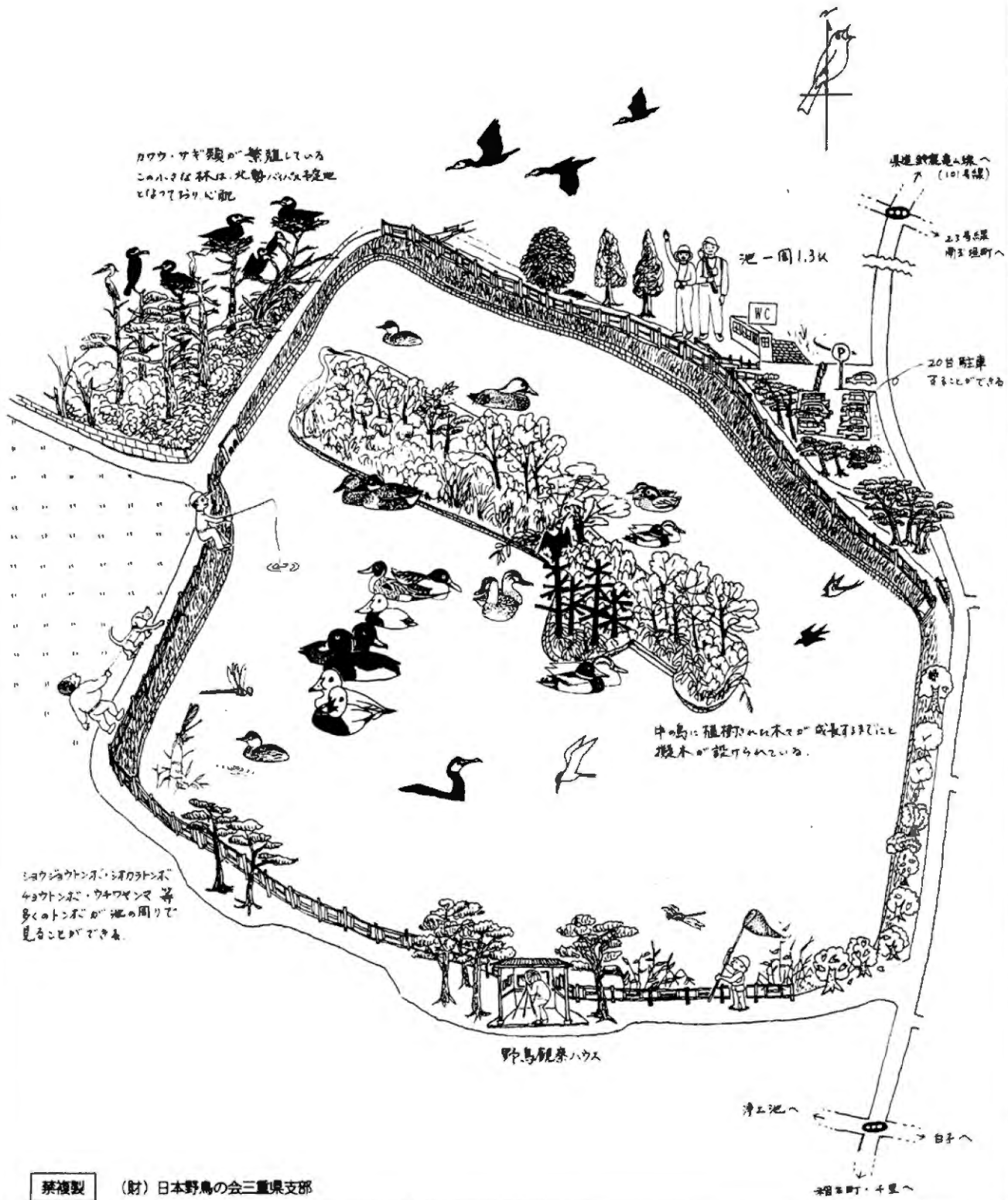
※観察現地にて、谷本勢津雄氏にご指導をうけた種

しい姿勢と種の識別に関するご指導を賜り、本誌への報告をお勧め頂きます本支部顧問・橋本太郎先生、及び、現場にて実物の野鳥を前にご親切なご教示を頂きます本支部理事・谷本勢津雄氏のお二人に深く感謝いたします。

なお、本誌第10号に報告しました、ハリモモチウシャクシギ、シロハラホオジロの記録は決定的な証拠写真をお示しすることが不可能ゆえ、参考記録にとどめて頂きたく、お詫びして訂正させて頂きます。

探鳥地マップ (4) 石垣池

所在地 鈴鹿市西玉垣町
 時期 11月中旬
 ~8月頃



カワウ・サギ類が繁殖している
 この小島は林は、北勢ババの産地
 とはつたり心配

池一周1.3km

国道鈴鹿線山崎へ
 (10分程度)

23号線
 西玉垣町へ

20台駐車
 できるようです

中の島に種々の木々で成長すると
 後木の設けられている。

シロクワ・シロクワ・シロクワ
 シロクワ・ウチワマンマ 等
 多くのトンボが池の周りで
 見ることができま。

野鳥観察ハウス

浄土池へ

白子へ

稲田町・子星へ

禁複製 (財) 日本野鳥の会三重県支部

◀ 冬の水鳥とカワウの繁殖が見られる探鳥地 ▶

石垣池

1/25,000地形図：『鈴鹿』『白子』

伊勢鉄道・玉垣駅より徒歩約5分

三交バス・野町バス停より3分

石垣池は鈴鹿市の神戸・白子・平田町の三角形のほぼ中心にあり、池の広さ約14.3ヘクタール、周囲約1.3キロメートル、池の真ん中には中の島と呼ばれる小島があります。池の周りは西に松林があり、水田や畑、人家でかこまれています。

冬期は約3000羽のカモ類が飛来し羽を休めています。以前中の島は松林で、毎年シラサギの仲間1000羽ほどの集団繁殖地として知られていましたが、1986年松林が伐採されてしまい今その姿を見ることはできません。そのころ300羽くらいのカワウが飛来して繁殖を始めました。しかし最近はこちらもどんどん数を減らしていますが、まだ悪条件にもまげず2月上旬から8月頃にかけて子育ての様子が見られます。鈴鹿市は最近、池の南側に観察ハウスをつくり、カワウが戻って巣をかけることができるようにと、中の島の南側に擬木を設けています。

【今までに観察された主な鳥】

カンムリカイツブリ	カイツブリ	カワウ	マガモ	カルガモ	ハシビロガモ
コガモ	ヨシガモ	オカヨシガモ	オナガガモ	ヒドリガモ	ホシハジロ
キンクロハジロ	スズガモ	ミコアイサ	ユリカモメ	コアジサシ	ゴイサギ
ササゴイ	アマサギ	コサギ	チュウサギ	ダイサギ	アオサギ
オオバン	バン	ケリ	セイタカシギ	コジュケイ	キジ
キジバト	カワセミ	コゲラ	ツバメ	キセキレイ	セグロセキレイ
ハクセキレイ	ビンズイ	ヒヨドリ	モズ	ジョウビタキ	ツグミ
ウグイス	オオヨシキリ	メボソムシクイ	シジュウカラ	ヤマガラ	エナガ
メジロ	ホオジロ	カシラダカ	アオジ	カワラヒワ	ムクドリ
シメ	イカル	スズメ	ハシボソガラス	ハシブトガラス	

☆バスは白子駅西口より、三交バス平田町駅行き、又は鈴鹿サーキット行きにお乗りください。

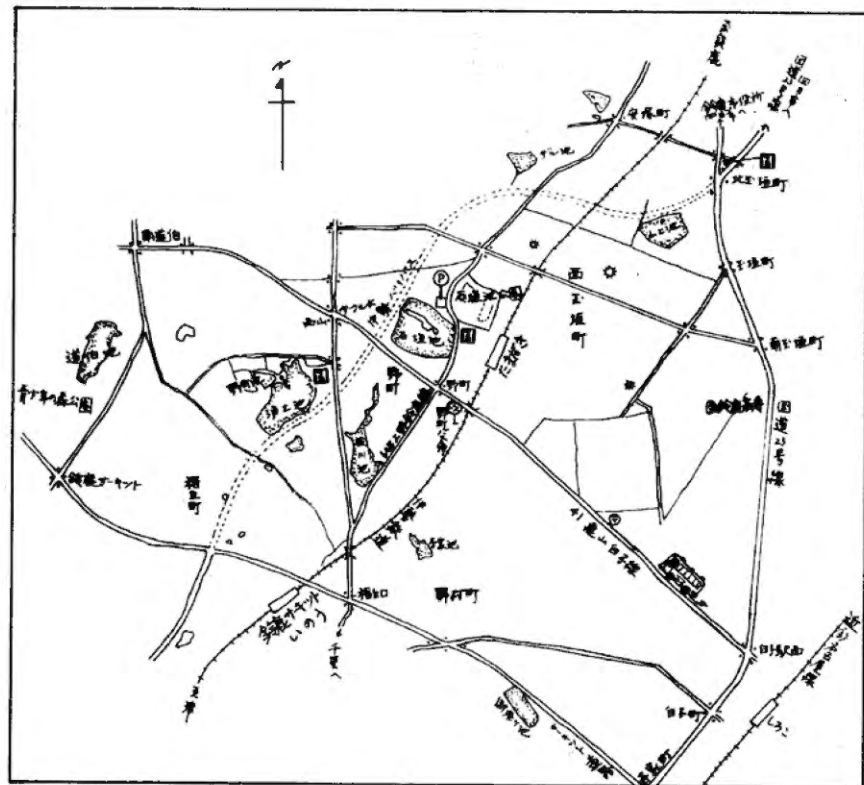
☆池の南岸には観察ハウスがあります。

☆野鳥のほかいろいろなトンボが見られます。

☆駐車場には20台まで止められます。トイレもあります。

☆食事・喫茶は池の東側にありますが軽食程度、23号線にはいろいろあります。

☆近くには浄土池、蔵川池、山上池、道伯池などがあり、足をのびして見て下さい。



鳥と木の実

前回は台風にたたられ中止となってしまったこの講座ですが、今日は暖かい良い天気、絶好のバードウォッチング日和となりました。

会場の津・借楽公園には十数名の参加者が集まっています。初心者対象のこの講座ですが中にはなんだかベテランの人も混じっています。自己紹介の後、早速リーダーからテーマの説明と問いかけがありました。

「今日は木の実を題材に、鳥と他の生物との関係についてウォッチングしてみましょう。生き物同士の関わりと言われると何を思い浮かべるのでしょうか。」

食べたり食べられたりという「食物連鎖」、イソギンチャクとヤドカリとの関係に見られるような「共生」などの答が出されました。いきなり難しい言葉が出てしまい、リーダーも驚いています。「託卵」などという、初心者では知っている人があまりいないのではないかと答もありました。そうした中、鳥がフンをして種を運ぶというのがありました。

リーダー「植物にとってはそれはどういう意味があるのでしょうか。では、今日はそうしたことを考えながら、鳥だけでなく、木の実も探してみましょう。」

今回の観察用紙は木の実用です。チェックポイントは【実、色、大きさ、さわった感じ、におい、味、鳥が好むか】。鳥になったつもりで観察スタートです。そうそう、フィールドマナーも改めてチェックです。

ポイント：鳥とそれに関わるまわりの自然も観察しよう

ポイント：いつでもフィールドマナーは忘れずに

- ①ゴミはすべて持ち帰ろう
- ②採集はしない
- ③途中で帰る時はリーダーに声をかけて

まず、公園の中のメタセコイヤを観察。実をスケッチしてよく見ると、固い殻の間に柔らかい薄茶色の種があるのが分りました。これなら嘴の小さい鳥が突っつくかもしれないと想像します。やはりよく見るのが一番です。木から少し離れた時、ヒヨドリがメタセコイヤに来ましたが、実を食べているかどうかまでは確認できませんでした。つづいて、同じようにモチの実やヒサカキの実を観察したり、食べたりしながら進んでいきます。

途中リーダーが動物のフンを見つけました。崩して

観察してみると小さな植物性のものを食べています。これも今日のテーマと関係がありそうです。

広場のような所に出たので、それぞれの成果を発表し、感想を話し合います。

「食べてみるとほとんどの実はニガイシ、シブイのに鳥はよく食べるなあ」

「よく実がなっている割には鳥があまりいないなあ」

私たちの後ろではアラカシのどんぐりの落ちる音がしていました。どんぐりを好む鳥たち（オシドリ、カケス）や、その食べ方（ヤマガラ）の行動が話題になりました。

リーダー「なぜ植物は実をつけるのでしょうか。また、なぜその実を鳥に食べてもらいたいのでしょうか。」

これについては、フンと一緒に遠くへ運んでもらい自己を増やすためという意見で、今日のテーマの答えしきものができました。話はさらに、種が他にどのような手段で運ばれるのか、鳥以外の動物のフンではどうか、あるいは、カケスの貯食行動にまで広がっていききました。

その後はシャシャンボを見つけてそのおいしさを楽しみましたが、ヒサカキと間違えないようその見分け方を教わりました。また、公園の一角には格好の教材であるヤドリギもあったので、レンジャクとの関係について解説を聞きました。

最後にリーダーのまとめです。

「今日は鳥が食べているところをウォッチングしようという期待通りには行きませんでした。鳥と木の実を題材に自然界のさまざまな関係を考えて見る事ができたと思います。」

ポイント：鳥の行動を通して自然界の仕組みを考えてみよう



○神社の森観察会（伊勢市豊川町外宮）

- ・日 時：1995年8月5日（土）13:15～14:15 晴
- ・担 当：杉浦邦彦
- ・参加者：13名 観察種：6種

今年は連日の猛暑で、勾玉池にはヒシが異常に大群落をつくっていた。そのせいか、トンボ類の発生が少ないのか、池の上空にはツバメは少なくかなり離れた上空を飛んでいた。ドバト、スズメが優占していたのは人が餌を与えているからである。ドバトの黒色化が最近目立っている。31羽中4羽が白い傾向だった。メジロ、カラ類の姿が確認されなかった。セミの声が多い。

○神社の森観察会（伊勢市豊川町外宮）

- ・日 時：1995年10月7日（土）13:00～14:40 曇
- ・担 当：杉浦邦彦
- ・参加者：10名 観察種：9種

コガモがやってきていたが1羽だけ。例年より少ない。曇っていたせいもあったが、ツグミ、アオジ、シロハラなど冬鳥の渡来が遅れていた。アキアカネ、ウスバキトンボが少なかった。

○木曾岬・鍋田干拓地合同探鳥会（愛知県弥富町）

- ・日 時：1995年10月22日（日）10:00～12:30 晴
- ・担 当：木村京子
- ・参加者：27名 観察種：33種

木曾岬干拓地をおおうセイタカアワダチソウの花のやまぶき色の波がなかなかみごとでした。

探鳥会全体としてのまとまりが乏しく、初めて行く初心者には、とまどいが多いような気がしました。

○亀山1金探鳥会（亀山市椿世町）

- ・日 時：1995年11月10日（金）9:00～12:30 晴
- ・担 当：楢原 葵
- ・参加者：12名 観察種：27種

タシギは見られなかったが、ワシ・タカ類3種（トビ、オオタカ、ハイタカ）が見られた。

昼食後、和田池で二次会をおこなって、カワセミ、キセキレイ、カワウ（冬のねぐら？）、ダイサギ、カイツブリ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オシドリを見た。

○松阪・庄土曜探鳥会（松阪市庄町）

- ・日 時：1995年11月11日（土）9:30～11:30 晴
- ・担 当：中村洋子、宮田たつ

- ・参加者：5名 観察種：21種

櫛田川にはカモ類はいなかったが、カワセミ、カワガラスはじっくり見られました。

セグロセキレイがトンボを捕らえようとしたが、3回も失敗した。鳥も生きるってたいへんだなあと思った。（中村）

○多度峡探鳥会（桑名郡多度町多度）

- ・日 時：1995年11月12日（日）9:00～12:00 晴
- ・担 当：藤田克三、楢原 葵
- ・参加者：7名 観察種：20種

紅葉も色付き、小鳥たちもなにがしか活気づいてきたように思います。今冬も観察するぞ!! 私はオウムではありません。

（探鳥会中、ヤマガラ、ヒガラのおとりで密猟をおこなっている人物を発見し、注意しました。）

○松阪公園探鳥会（松阪市殿町）

- ・日 時：1995年11月12日（日）10:30～11:45 晴
- ・担 当：谷本勢津雄、中村洋子
- ・参加者：12名 観察種：11種

種類は少なかったが、小春日和でのんびりした探鳥会だった。（中村）

○亀山水曜探鳥会（亀山市亀山公園）

- ・日 時：1995年11月15日（水）9:20～12:00 曇後晴
- ・担 当：楢原 葵
- ・参加者：12名 観察種：24種

「公園池でカモ（カルガモ以外）を探そう」の標題で行った探鳥会だったが、カモの種類は全部で3種（マガモ、カルガモ、ハシビロガモ）のみだった。

我々の足下に飛び立ったキジが近くの休耕畑の中に入り、雄のみ出てきて美しい羽根を長い間見せてくれた。

○登茂山探鳥会（志摩郡大王町登茂山）

- ・日 時：1995年11月17日（金）10:00～12:00 晴
- ・担 当：中村みつ子、松本恵理子
- ・参加者：11名 観察種：16種

交通の便の悪い志摩の方まで来ていただいたのに、鳥の数も少なく気の毒な探鳥会でしたが、天候に恵まれ、景色の良さにフォローしてもらい、少しホッとしました。カイツブリが海に潜っている姿が観察できました。（中村）

○バードウォッチング入門③

—鳥と木の実— (津市借案公園)

・日 時：1995年11月18日 (土) 9:30~12:00 晴

・担 当：橋本祐子

・参加者：11名 観察種：18種

木の実はいろいろ見つけたが、鳥の姿は少なく、木の実を食べている様子は観察できなかった。

○鳥岳探鳥会 (飯南郡飯南町粥見)

・日 時：1995年11月26日 (日) 9:00~12:30 晴

・担 当：谷本勢津雄、中村洋子

・参加者：18名 観察種：23種

登る途中、植林地より雑木の所の方がヤマガラ、エナガ、コゲラ等鳥が多く現れました。反射鏡横の展望台からは粥見の町が眼下に広がり、遠く大洞山、尼ヶ岳の山なみも見えました。(中村)

○木曾岬・鍋田干拓地合同探鳥会 (愛知県弥富町)

・日 時：1995年11月26日 (日) 8:30~12:00

・担 当：濱中勝彦

・参加者：30名 観察種：42種

冬の鍋田らしくなってきた。初めて参加された方も鳥の多さに感動!! 一人でも多くの方に鍋田・木曾岬の良さを自分の目で確かめてほしい。

○カラ類の混群と紅葉を見よう (三重郡菟野町千草)

・日 時：1995年11月30日 (木) 9:30~11:50 曇

・担 当：矢田栄史

・参加者：15名 観察種：15種

初冬の時々しぐれる天気です野鳥も少ない。テーマであるカラ類の混群にも一度も出会わなかった。森の中の遊歩道を歩くが静かである。かろうじてメジロの群やキセキレイ、カワラヒワを観察する。紅葉の方はハゼ、タカノツメ、ドウダンツツジ等、赤、黄、オレンジといろんな色を楽しむ。



○亀山1金探鳥会 (亀山市椿世町)

・日 時：1995年12月1日 (金) 9:00~12:15

曇時雨後晴

・担 当：橋原 葵

・参加者：11名 観察種：26種

どこへ行っても工事中のような気がする状態で、鳥は少ないように思う。例年ほぼ同じような所をなわばりにするルリビタキ、ジョウビタキもその場にはいない。河川も工事中のためか、カワセミの密度が高いように思われる。始めてすぐに、カワセミの狩と、大きな獲物を何度も木の枝にたたきつけ魚の頭の骨を砕いてから飲み込む様子を、近くから長時間見ることができた。たたきつけた木の枝には魚のうろこが銀色に付いていた。

○神社の森観察会 (伊勢市豊川町外宮)

・日 時：1995年12月2日 (土) 13:00~14:00 晴

・担 当：吉居瑞穂

・参加者：15名 観察種：16種

今回はカモを中心とした観察会。例年に比べてコガモの数が非常に少なく、マガモが多い。ツグミ、シロハラ、アオジ等の冬鳥の姿が見えない。

○五十鈴公園探鳥会 (伊勢市宇治館町)

・日 時：1995年12月3日 (日) 10:00~12:00 晴

・担 当：今村 禎、吉居瑞穂

・参加者：25名 観察種：23種

12月になっても冬鳥のほとんどいない探鳥会でした。イカルチドリが全員で観察でき、かろうじてツグミが出てくれてよかった!! (今村)

○八重田池のカモを見る (松阪市八重田町、山室町)

・日 時：1995年12月9日 (土) 9:30~11:30 晴

・担 当：宮田たつ、中村洋子

・参加者：12名 観察種：12種

八重田池で海ガモ、八条ヶ池でオシドリ、マガモがしっかり見えました。山鳥は今回はなぜか殆ど見られません。(宮田)

○多度峡探鳥会 (桑名郡多度町多度)

・日 時：1995年12月10日 (日) 9:00~12:00 晴

・担 当：藤田克三、橋原 葵

・参加者：11名 観察種：19種

朝の冷え込みも一段と身にしみるようになり朝起きも少々つらい季節となりましたが、多度峡の鳥たちは寒さもなんのその、元気よく飛び廻っているようです。ノスリ、オオタカ、ハイタカとワシタカ類も三種見られ、寒さもなんのそのといったぐあいです。(藤田)

○亀山水曜探鳥会（亀山市亀山公園）

- ・日 時：1995年12月13日（水）9:20～12:00
- ・担 当：楢原 葵
- ・参加者：15名 観察種：23種

「今、野鳥はどのように鳴いているか」というテーマで始めたが、地鳴きがはっきりと聞こえてくる鳥は少なく、ヤマガラがツツピーツツピーと少し早いテンポで鳴く姿を見せてくれた。ジョウビタキは崖の上のどこかで鳴いているのだが姿を見せなかった。

○二ツ池探鳥会（伊勢市黒瀬町）

- ・日 時：1995年12月15日（金）9:10～12:00 曇
- ・担 当：林 淳子
- ・参加者：18名 観察種：25種

いつもは東池と西池に種類別に休んでいるカモが、今年は西池に全ての種類が入っていた。東池にはキンクロハジロとホシハジロのみで、それも合計で7羽だった。東池の畔にコサギとカモの羽が散乱していた。以前に西池でオオタカがゴイサギを狩るのを見ているのでオオタカではと推定する。池の回りの雑木林やたんぼ等に冬鳥のツグミ、ジョウビタキが見られない。また、他の鳥数も少なかった。

○南部丘陵公園探鳥会（四日市市泊村）

- ・日 時：1995年12月15日（金）9:50～11:15 曇
- ・担 当：木村京子、尾畑玲子
- ・参加者：12名 観察種：14種

ツグミ、シロハラ、カラ類のいない寂しい里山が印象的だった。例年よりかなり少ない山の小鳥達だが、来年は元通りに増えてくれるだろうか。探鳥会は各自が確認した鳥を地図の中に書き入れていき、最後に全員のデータを一つにまとめた。そして、野鳥それぞれの生息環境について確認した。（木村）

○安濃ダム探鳥会（安芸郡芸濃町）

- ・日 時：1995年12月23日（土）10:00～12:00 晴
- ・担 当：平井正志
- ・参加者：22名 観察種：13種

安濃ダムは極度の渇水でオシドリもマガモも少なかった（38羽）。また、公園化の工事で環境も悪化している。横山池も渇水、かつ作業の舟が入っていてほとんど鳥はいなかった。

○木曾岬・鍋田干拓地合同探鳥会（愛知県弥富町）

- ・日 時：1995年12月24日（日）10:00～12:00
曇時々雨

- ・担 当：藤田克三
- ・参加者：18名 観察種：42種

要望書提出も済み、後どういう活動をどうするか、私の頭の中をぐるぐる回っている状態です。鳥の方としては、タカ類やタゲリ、タヒバリ、キジなどが元気よく飛び回っていますが、例年に比べ数が少ないようです。保護をやられる方が少ないせいでしょうか。



○亀山1金探鳥会（亀山市椿世町）

- ・日 時：1996年1月5日（金）9:00～12:20
曇時々晴

- ・担 当：楢原 葵
- ・参加者：9名 観察種：31種

「ベニマシコを探す」の標題は見事につぶれた。今冬は少ないと思っていたツグミは、本日は木に止まっているところを見ることができた。しかし、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガはどうしているのだろうか。

○石垣池探鳥会（鈴鹿市西玉垣町）

- ・日 時：1996年1月7日（日）10:00～12:00 晴
- ・担 当：市川美代子、市川雄二

- ・参加者：28名 観察種：29種

市の広報に載せていただいたので、初参加の方が半分いらして下さいました。暖かいよい日でした。

（市川美）

○松阪阪内川平日探鳥会（松阪市内五曲町）

- ・日 時：1996年1月11日（木）9:30～11:30 晴
- ・担 当：宮田たつ、中村洋子

- ・参加者：10名 観察種：26種

楽しみにしていたカワセミがよく見られた。カワラヒワの光線による色の変化がわかった。また、イカルの群が川に水飲みに来ては、松阪公園に帰るように思われた。（宮田）

○多度峡探鳥会（桑名郡多度町多度）

- ・日 時：1996年1月14日（日）9:00～12:00 曇
- ・担 当：藤田克三
- ・参加者：10名 観察種：20種

年末の大雪それから今年に入ってから10日前の大雪で、多度峡の探鳥会のコースにもかなり雪が残り歩きにくい状態だったので、途中のカジカ橋で引き返しました。1時間ほど余ったので、多度川揖斐川合流点でコガモ等の観察を行いました。（この時もツリスガラ、オオジュリン等が観察できるんですがね。今日は見られませんでした。）

○亀山水曜探鳥会（亀山市亀山公園）

- ・日 時：1996年1月17日（水）9:20～12:00 晴
- ・担 当：伊藤多紀子、楢原 葵
- ・参加者：16名 観察種：26種

年初めの訪問者、アオバトに出会えた。大木に止まっている彩姿に、全員が釘付けされてしまいました。（ゆっくり観察ができました）参加者がアオバトを見て感動している姿がとても嬉しく思いました。テーマ「カモの羽色」については、池で休んでいるカモが見られず残念でした。（伊藤）

○勾玉池探鳥会（伊勢市豊川町外宮）

- ・日 時：1996年1月19日（金）9:00～11:20 曇
- ・担 当：吉居瑞穂、林 淳子
- ・参加者：15名 観察種：19種

カモも小鳥類もとても少ない。この時期いつも必ず見られる、アオジ、エナガ、ヤマガラ、コゲラなどもまったく出現せず。ゴイサギ20羽くらいの群がどこから追い立てられてやってきて、ぐるぐる飛び回り、またどこかへ行ってしまった。ムラサキシキブの実がみごとだった。（吉居）

○南部丘陵公園探鳥会（四日市市泊村）

- ・日 時：1996年1月21日（日）10:00～12:00 晴
- ・担 当：高 和義、濱中明代
- ・参加者：25名 観察種：15種

晴れていたが冷たい風の中の探鳥会となった。観察された鳥は少なかったが、赤松を啄んでいるコゲラや、人懐こくついて来た雌のジョウビタキの可愛い姿を目の前で見ることができて、皆大喜びであった。鳥合わせの時、鳥名と共に目立った色を報告し合った。（高）

○二ツ池探鳥会（伊勢市黒瀬町）

- ・日 時：1996年1月27日（土）9:15～12:00 晴
- ・担 当：今村 禎、世古口有司

- ・参加者：26名 観察種：28種

天気も良く、寒くもなく、カモが10種類も観察でき、最後には西村泉さん、橋本祐子さん手作りのぜんざいをごちそうになり、リーダーの日頃の行いの良さを感じさせる探鳥会でした。

追伸。今年は東池にはほとんどカモが入らず。池の回りにオオタカラしき食跡があり、それが原因かもしれない。（今村）

○冬の“お客様”を迎えて（津市島崎町）

- ・日 時：1996年1月28日（日）9:30～12:00 快晴
- ・担 当：橋本富三
- ・参加者：46名 観察種：35種

天候に恵まれた暖かい探鳥会日和。時間が満潮に近く干潟が少なかったせいかシギ、チドリ類はほとんど見られなかったが、ミコアイサ♀2、カワセミが観察できた。鳥合わせの後、杉浦会長から鳥とその自然環境への気配りのお話をいただいてから、海岸のゴミ拾いを全員で実施した。たった10分で30袋近いゴミが集まった。皆の海や川をもっともっと大事にしたいものだ。津ケーブルテレビの取材があり後日放映された。

○木曾岬・鍋田干拓地合同探鳥会（愛知県弥富町）

- ・日 時：1996年1月28日（日）10:00～12:00 晴
- ・担 当：藤田克三
- ・参加者：25名 観察種：41種

今冬各地では、ツグミ等の野鳥が少ないと言う事を聞きますが、木曾岬、鍋田でも例年に比ベツグミやカモ類、タカ類の数が少ないように思われます。なぜ少ないか考えてみたいと思いますが、観察時間が無い、情報が無い、気力が無い、能力も無い。困ったものです。

フィールドスコープ売ります

機種：ニコンフィールドスコープII-A
（ソフトケース付、定価48,000円）
接眼レンズ：20-45×ズーム
（φ60、定価17,000円）

1995年6月25日購入ですが未使用で、1ケ年の保証書がついています。値段は応談ですが45,000円程度を希望します。

連絡先：

ご希望の方は直接中野さんにお申し出下さい。支部としては以後のことはいっさい関知しませんので、個人の責任において処理なさってください。

木曾岬干拓地サンクチュアリ化の要望書を三重県知事に提出

木曾岬干拓地サンクチュアリ化委員会 委員長 藤田克三

去る1995年12月14日（木）、かねてより提出を予定していた木曾岬干拓地サンクチュアリ化の要望書を、愛知県野鳥保護連絡協議会と連名で三重県知事に提出しました。

当日は、愛知県野鳥保護連絡協議会の浅沼議長、桑山事務局長、三重県支部の藤田、高、木村の5名が県庁へ行き、多忙な知事の代理として永野農林水産部長（木曾岬干拓地担当部署は農林振興課）に要望書を手渡しました。

そして、木曾岬干拓地一帯は二十数年前まで、シギ、チドリ等の渡り鳥たちのえさ場や休息地として非常に重要であったこと、日本各地で干潟等が失われつつある現在、かつての自然環境をこの干拓地に少しでも多く取り戻すべきであることを訴えました。また、干拓地となった現在もチュウヒ等が繁殖し、オオタカ、ハヤブサなど環境庁のレッドデータブックに危急種として記載されている野鳥等が多数生息し、その重要性は変わらないことも説明しました。

これに対し、「木曾岬干拓地の利用方法については流通センターや高層住宅などいろいろな案が出されているようだが、県境は解決したものの、木曾岬、長島両町の町境が解決しておらず、その後の補償問題もあり、今のところ当初の計画のように農地（減反政策のため畑作農地）として考えている。愛知県との兼ね合いもあり、その他の使用目的については愛知県と話し合っただけで決めて行くつもり。前の知事のと時から、『自然に優しい』ということを考えているので、今後考慮していきたい。要望書の趣旨は知事に伝える。」との永野部長の回答でした。

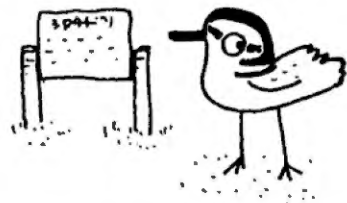
私が考えるには、日本の農業政策の変化に伴い、農家の農業に対する意識の低下の中、木曾岬干拓地でどれだけの農家が畑作農業を行うのでしょうか。そして第二に、木曾岬干拓地を第二名神高速が通る予定のため（現在、弥富野鳥園前まで着工）、この地を中経連等が見逃すはずがないと思うのです。また農地以外に使用するとしたら、さらに巨額の費用を投じなければなりません。そうなれば誰が利益を得るのか、目に見えてきそうです。

野鳥の会としては、チュウヒやオオタカ、ハヤブサなどの生息地、シギ、チドリ等の渡り鳥の中継地として、次の時代に残さなければならないと思います。そ

のためには、一層、自然保護の意識を持って行動しなければなりません。ただ野鳥を追いかけまわして、楽しんでいるだけの時ではないと思うのです。

なお、同じ内容の要望書を木曾岬町長、長島町長、愛知県知事、弥富町長にも提出しました。

三重県の鳥シロチドリのために
いい汗かこう！



今年もシロチドリの繁殖地を守るためにくい打ち作業やピラくばりをします。力仕事に自信のない方、差し入れ大歓迎です。作業のあとバードウォッチングもします。みんな来てね！

日時：3月24日（日） 10時～13時

集合場所：田中川右岸サギコロニー前
（安芸郡河芸町）

近鉄千里駅より徒歩15分

持ちもの：軍手、かけや（くいを打つ
道具）、帽子、水筒、タオルなど

小雨決行

問い合わせ先：西村（TEL 〇〇〇〇）

シロチドリ保護委員募集

シロチドリ保護に関する企画や調査をしていただける方、事務局まで連絡して下さい。自薦他薦かまいません。

お待ちしております。



三重県支部交流会なごやかに開催

昨年11月25日、恒例の支部交流会が松阪地区のお世話により、飯南町のリバーサイド「茶倉」で開催されました。今回の参加者は20名で、その夜はボタン鍋を囲んでの鳥談義、翌日は鳥岳への登山と探鳥により、おおいに親睦を深めました。その感想を久居市の内藤さんが次のように寄せてくださいました。

支部交流会・鳥岳探鳥会に参加して

内藤 昭子

支部交流会に参加するため、11月25日夕方、久居駅から松阪に向かう。

暮れかかった近鉄松阪駅で中村洋子さんが出迎えてくださる。初対面なのに、まるでずっと前からの友達のようににこにこ顔で親しみを込めて暖かく迎えて下さる。

「あー、よかった」と、嬉しくなる。

松阪駅の「出会い」のときの雰囲気は、実はこの「野鳥の会」の雰囲気であった。初心者の方も、どつぷりとこの暖かさの中につかまって交流会・探鳥会を十二分に楽しんだのである。

「茶倉」で行われた夜の交流会では、吉居さんの集められた「羽」を見せていただく。野鳥の好きな方の根気の良いことにも感心する。後の話題は、「鳥々々……」と野鳥のことに尽きる。夜11時頃まで話が弾む。

野鳥が人間を善人にするのか、善人が野鳥を好きになるのか、それはわからないが、鳥の話をされる時の会員の方々の表情は、まるで少年・少女のように純粋で清々しい。

翌26日早朝、霧の立ち込める櫛田川沿いで野鳥を観察する。

広々と続く茶畑は霜で真っ白、吐く息も白、川面にかかる霧も白。白い静寂の中で鳥を観る。

カワガラスが水面近くを飛ぶ。アオサギが立って居る。セグロセキレイ・キセキレイが岩の上を跳んでいく。ウグイス・ケリ・カワラヒワの鳴き声が聞こえる。観察できた鳥は19種。

午前9時から鳥岳に登る。

裸木を飛び交う愛らしいエナガや、木の幹に吸い付くような格好で動きまわるコゲラ、一瞬のうちに遠くへ飛び去るカケスなどを観察しながら登る。

足元のフユイチゴの赤い実が美しい。しっとりとした落葉が足裏に優しい。

展望台でしばらく休んでから山を下りる。

観察した鳥、24種。

晩秋の山、野鳥、山野の草々、それに加えて暖かい心の交流。とびっきりの「贅沢」を味わった二日間であった。

中勢沿岸流域下水道（志登茂川処理区）の浄化センター設置に

関する意見書の提出について

事務局長 木村京子

津市と河芸町にまたがる海岸に、流域下水道の浄化センターを設置する計画が発表され、三重県土木部下水道課より設置を了承してほしい旨の話が昨年9月に支部長のところにありました。その後、運営事務局の方でも県担当者から話を聞き、理事会などでも検討した結果、この海岸は残り少ない伊勢湾の自然海岸であり、三重県の鳥であるシロチドリ（シロチドリ）の自然海岸での繁殖地であるため、了承できないとの結論に達しました。

そこで、①「三重県の鳥シロチドリ」の繁殖できる自然海岸を残してほしいこと、②工事用仮設道路も含めると大規模な自然破壊になること、③環境影響評価のための調査が不十分なこと、④「伊勢の海県立自然公園」の区域内であること、⑤伊勢湾の自然海岸を最低これだけは残すというビジョンを三重県が持っていないこと、などを理由に、「自然海岸をつぶしての設置には反対する」との内容の意見書を、1995年12月10日付けで三重県に提出しました。

汚水をたれ流して伊勢湾を汚し続けることは、もちろんやめなければならないのですが、自然海岸を残しつつ、伊勢湾の水質向上に努めてもらいたいと私たちは考えています。伊勢湾あつての自然海岸であり、自然海岸があつてこそその伊勢湾なのではないでしょうか。

海の幸が豊富で生き生きとした昔の伊勢湾を取り戻すことは、すぐにはできないかもしれませんが、しかし、少しでもかつての姿に近づけるよう、努力はしていかなければなりません。それには行政まかせだけではなく、私たちが海や川や水について関心を持つこと、自分たちの生活様式・生活態度を見直していくことも必要なのではないでしょうか。

シロチドリの住める砂浜を残し、美しい伊勢湾をよみがえらせるためにはどうしたらいいのか、何をしていけばいいのか、自分の問題として考え、行動していきましょう。

事務局より

☆この冬の小鳥類の数の少なさは異常なほどです。例年の1/4~1/5、種類や場所によっては、1/10ほどという声も聞かれます。この原因が何なのか、はっきりしたことは今のところ言えませんが、異常気象などを引き起こしている、地球規模での自然環境の悪化が原因の一つになっていると想像することは難しくありません。しかし、この現象、つまり自然からのメッセージ・警告に気がついていない人が何と多いことでしょうか。

気がついた人は機会のあるたびに声に出していきましょう。そして、この現象がこの冬だけのことで終わるのか、これからもずっと続いていくことなのか、見続けていきましょう。また、野鳥の会としてどうしていくべきなのか、ご意見もお聞かせください。

☆早いもので1995年度も残り少なくなりました。4月には1996年度の三重県支部総会を開きますので、お誘い合わせの上ご出席ください。三重県支部設立から3年がたとうとしており、当初の初々しさも薄らいできた感がありますが、マンネリ化にカツを入れ、三重県支部の活動を考えていきたいと思えます。

支部活動は探鳥会だけではないはずですが、これだけ自然が窮地に追い込まれている中、野鳥の会は何をしたらいいのか、何ならできるのか、会員一人一人が何をしていくべきなのか、考えてみてください。そして、なにかいい提案がありましたら、ぜひ運営事務局までご一報ください。皆様のすばらしいアイデアや、三重県支部運営についての建設的なご意見をお待ちしています。(運営事務局：木村京子)

編集後記

今号は始めから終わりまで冬鳥の異変を取り上げたものが多く、まるで特集のようになってしまいました。大変心配な状況で、上記の木村さんの訴えにもあるように、考えるべき事、行動すべき事が多いように思います。

さて、あいも変わらぬ下手な編集ではありますが、今回は初めて原稿をお寄せいただいた方も登場され、少しは新鮮味のある誌面になったかなと思います。いかがでしょうか。また、短歌や俳句もお寄せいただきましたのでその深い味わいをお楽しみいただけるものと思っています。ご執筆の皆さま、どうもありがとうございました。◆いつも貴重な野鳥情報を送っていただいている嬉野町の多田さんは、三重昆虫談話会でもご活躍のパワーウォッチャーです。意に添わぬ事ばかりとは思いますが今後ともよろしく願います。◆少し執筆者が南の方に偏ってきています。北の方の皆様も振るってご寄稿下さい。願います。◆突然ですが、ひよんなことから「売りますコーナー」ができてしまいました。今後もこの種の情報を受け付けますのでご利用下さい。ただし、責任は持ちません。

寒い冬でしたがようやく暖かい日も現れ、何ということもない時に突然光の春を感じる時があります。朝、聞こえてくるスズメの声も心なしか変化してきたように思います。来るべき春が「沈黙の春」にならないよう祈る気持ちです。(せ)



しろちどり第12号

1996年2月発行

表紙絵 平井正志 題字 濱田 稔

編集 世古口有司 〒

TEL

発行者 財団法人日本野鳥の会三重県支部

〒516 伊勢市宇治浦田2丁目9-4 杉浦邦彦方

TEL

印刷 館印刷 〒510-13 三重郡菰野町田口1903-3